

柏木教会月報

4月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156

命を保つて永遠に至る

ヨハネによる福音書一一章二〇～三三節

牧師 大浦 勝

「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保つて永遠の命に至る。」(二五節)

過越の祭りのためにエルサレムに来た何人かのギリシア人がキリストに面会を求めたとき、キリストは「人の子が栄光を受ける時が来た」と言わされた(二三節)。この福音書はこれまで何度も、「イエスの時はまだ来ていなかつた」と記しているが(七・二〇他)、今やついにその時が来たのである。それはキリストが十字架にかかるて死なれる時である。キリストはギリシア人が訪ねて來たといふことを通して、いよいよその時が來たことを確認されたのである。十字架の死は単にユダヤ人のためだけではなく、ギリシア人を含めたすべての人ための救いのみわざだからである。キリストは「すべての人」を自分のもとへ引き寄せられる(二二節)。多くの人がキリストの十字架の恵みにあずかる。

キリストはこのことを「一粒の麦」のたとえで教えておられる(二四節)。一粒の麦はそのままではほとんど何の役にも立たないが、これが地に蒔かれ、土で覆われるならば、(そのことが「死ねば」という言葉で言い表されている)、多くの実を結ぶ。一粒の麦でさえる多くの実を結

ぶとすれば、神の独り子キリストの死が多くの実を結ばないということがあるであろうか。それがむなしく消え去るということがあるであろうか。キリストはすべての人を「自分のもとへ集め、救いの恵みにあずからせてくださる。キリストは多くの実りがそこから生まれるように、地に落ちて死ぬ一粒の麦となつてくださったのである。「教会はキリストの死の実りである」(カルヴァン)。わたしたちはキリストのもとへ集められ、罪を赦され、その命に生かされるキリストの民である。

わたしたちがキリストの死の実りであり、その命に生かされているとするならば、わたしたちの生き方もキリストの生き方によつて決定されている。二五節はそのことを教える。『愛する』と『憎む』という言葉が用いられているが、ここではそれぞれ「第一のこととする」と「第一のこととはしない」という意味である。わたしたちは自分の命を維持し、幸いであることを目標として生きているが、その時わたしたちはかえつて命を失うことになる。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである」(二四節)。むしろキリストがわたしたちのためにそうされたように、キリストに仕える時に、それはすなわち、隣人に仕えることであるが、わたしたちは自分の命を保つて永遠の命に至るのである。キリストと結ばれ、一つとされ、キリストが復活して生きておられるように、生きるものとなり(ヨハネ一四・一九)、キリストがおられる所に、いるものとされるからである(同一四・三)。わたしたちが懸命に得ようとしているもの、それはキリストの内にあるのである。